

イベントレポート

ドーナツ・プロジェクト 2023

—舞台芸術に携わる人のためのアーカイブガイドブックつくりました—

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

令和5年度文化庁 大学における文化芸術推進事業
舞台公演記録のアーカイブ化のためのモデル形成事業
ドーナツ・プロジェクト

DONUTS PROJECT

Index

演劇博物館シンポジウム

「ドーナツ・プロジェクト 2023

—舞台芸術に携わる人のためのアーカイブガイドブックつくりました— 開催概要

開催日時 2023年12月13日 18:00~20:00

主催 早稲田大学 坪内博士記念演劇博物館 ドーナツ・プロジェクト

助成 令和5年度 文化庁「大学における文化芸術推進事業」

プログラム

はじめに 岡室美奈子(早稲田大学文学学術院教授、文化推進部参与)

3

第1部 ドーナツ・プロジェクト これまでのあゆみ 田村優依(演劇博物館)

5

「アーカイブガイドブック」の紹介 中西智範(演劇博物館)

8

第2部 座談会 舞台芸術アーカイブの展望

11

福井健策
松井周
坂本もも
岡室美奈子
中西智範
田村優依

DONUTS PROJECT

はじめに



岡室美奈子

早稲田大学文学学術院教授・文化推進部参与

みなさま、本日はお忙しい中、演劇博物館主催「ドーナツ・プロジェクト 2023 舞台芸術に携わる人のためのアーカイブガイドブックづくりました」にお越しくださいませ誠にありがとうございます。この3月まで演劇博物館の館長を務め、現在は早稲田大学文化推進部参与という立場でプロジェクトに関わらせていただいております岡室美奈子と申します。まずは私のほうから簡単に、経緯と本日の趣旨をご説明いたします。

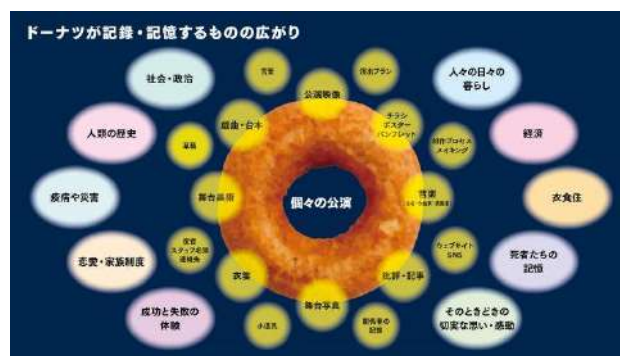
ドーナツ・プロジェクトの経緯

ご存知の方も多いと思いますが、演劇博物館はデジタルアーカイブ・コレクションに非常に力を入れて参りました。Wikipediaが出来た2001年にすでにデジタルアーカイブの公開を始めており、多彩なコンテンツを有しております。現在では早稲田大学文化資源データベースからもご覧いただくことができます。そして2020年度にはEPAD事業が開始されました。本日後半にご登壇いただく福井健策先生らが中心となって始められた事業です。このEPAD事業はたいへん活発な活動をされていますが、特に全国で死蔵されていた貴重な舞台公演映像を収集することが大きな活動の柱と

なっています。演劇博物館ではEPAD事業が収集した貴重な公演映像を全て寄贈していただき、Japan Digital Theater Archives (JDTA) を開設いたしました。これは舞台公演映像の情報検索サイトです。そのような活動をしているなかで、舞台芸術業界全体でアーカイブに対する意識を高めていくことが重要であり、またそれを担う人を育てる必要があるのではないかということに徐々に気がついていき、昨年度から舞台芸術アーカイブ人材育成事業として、文化庁の助成を受け、「ドーナツ・プロジェクト」を開始した次第です。

なぜ、「ドーナツ・プロジェクト」なのか？

舞台芸術の大きな特徴として、その中心となるべき個々の公演自体は保存できない、ということがあります。公演は幕が下りるとともに消え去ってしまいますので、それ自体を保存することができません。そのため舞台芸術アーカイブは、その公演の周辺の資料を集める、いわばドーナツの形のようなものとならざるを得ません。そこから「ドーナツ・プロジェクト」という名前が由来しています。ですがこれは単に資料を集めるということだけではなく、その背後にある人々の暮らしや、社会と政治のありよう、あるいは死者たちの記憶や、その時々切実な想いや感動、成功や失敗の体験など、様々なものがそれらの資料と一緒に保存されるものであると、ここで申し上げておきます。



舞台芸術アーカイブの意義

舞台芸術アーカイブの意義について、簡単に申し上げておきます。まず一つ目は、アーカイブ映像を利用した配信などの新たな活用の道を開拓することで、生の舞台とは別の価値や利益を生み出す財産であるということです。また、単に公演に関する資料を残すだけでなく、舞台芸術を通じて公式的・統計的な記録では残せない人々の営みや感覚・心情・記憶、社会のありようなどを未来に継承する記憶装置であり、時と場所を越えて、あらゆる時代・地域の人々が貴重な舞台の記憶を共有し、蘇らせることを可能にする再生装置でもあります。「記憶装置」「再生装置」という言葉はEPAD 事業で使われている言葉です。そして、デジタルアーカイブの構築により、<外>とつながる可能性や二次利用、あるいは異なる文脈での新たな利活用の可能性が拓けます。

本シンポジウムの趣旨

私たちはこのドーナツ・プロジェクトの中で、連続講座を実施いたしました。それについては担当の田村よりご報告いたします。また、連続講座とワークショップをまとめたハンドブックを全受講者に配布しています。そして昨年度は、アメリカの演劇アーカイブのマニュアル『演劇の遺産を守る』の日本語版を作り、ドーナツ・プロジェクトのサイトで公開しました。ですがこれはあくまでもアメリカで作られたものですので、必ずしも日本の舞台芸術業界の現状には合っておりません。そこで今年度は、日本版として『舞台芸術アーカイブガイドブック(以下、アーカイブガイドブック)』を作成いたしました。現在、『アーカイブガイドブック』仮版と、『ファーストステップガイド』仮版をWEBサイトで公開しております。これについては後ほど、担当の中西より発表いたします。

本日のプログラムですが、第一部は私たちの活動について発表させていただき、休憩を挟みまして、第二部は座談会を開催させていただきます。豪華なゲストの方々をお招きして、このガイドブックの評価などについてお話しいただきます。座談会の趣旨といたしましては、『アーカイブガイドブック』についてご意見をいただくとともに、これまでのドーナツ・プロジェクトの活動を振り返りながら、今後の舞台芸術業界におけるアーカイブの展望について話し合っていたいただきたいと思います。私たちの活動だけでなく、舞台芸術の可能性や課題について広く共有し、議論する場になればと願っております。最後までどうぞよろしく願いいたします。

※本シンポジウムが開催された12月13日時点では、仮版となっておりますが、2024年1月31日に『アーカイブガイドブック』、『ファーストステップガイド』の第1版を事業HPにて公開いたしました。

第1部

ドーナツ・プロジェクト

これまでのあゆみ



田村優依

演劇博物館

早稲田大学演劇博物館にて昨年度から本事業を担当しております、田村優依と申します。私からは「これまでのあゆみ」ということで、昨年度からの2年間の本事業についてご紹介いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

ドーナツ・プロジェクト事業内容

本事業の内容についてご紹介します。まずは、全12回の連続講座の実施です。10回の座学の講座と、2回のワークショップで構成しており、昨年度を基礎編、今年度を実践編と位置付けました。対面での受講と、アーカイブ動画での受講にわかれており、アーカイブ動画の配信は、基本的には全10回の座学講座のみを対象としております。次に、補助教材の作成です。受講生の方々が講座を受講した後も日々のアーカイブ活動の中で参照できるよう、補助教材を作成しました。まず講座の内容をまとめ、さらに背景知識や資料などを追加した『DONUTS BOOK』です。こちらは事業終了の月に全受講生の方に配布しております。そし

て、令和4年度はアメリカの演劇アーカイブを支援する団体が公開しているマニュアルを翻訳し、事業HPで公開いたしました。令和5年度はそれを参考に、『アーカイブガイドブック』、その要約版として『ファーストステップガイド』を作成しております。

そして、舞台芸術の研究者やアーカイブがご専門の有識者の方々にこの連続講座をご覧いただき、連続講座終了後に、難易度や受講生の方々の様子など多方面から各講座について評価していただいております。いただいた評価は、次年度の計画に反映させております。

講座受講生の対象・人数・内訳

講座募集の際には対象の方を幅広く設定しています。「アーカイブについての講座」というと少し心理的なハードルが上がってしまうと思いますが、本講座は専門的な内容を扱ってはいるものの、難易度はそこまで高く設定しておりませんので、少しでも舞台芸術のアーカイブに興味のある方でしたら、どなたでも参加いただける講座となっております。また今年度は、今年度から受講された方々も多くいらっしゃいましたので、今年度が初受講となる方には令和4年度の『DONUTS BOOK』をデータで共有するなど、フォローアップができるよう工夫いたしました。

受講人数については、令和4年度は定員が対面受講20名、アーカイブ受講50名の設定だったところ、結果的に対面受講25名、アーカイブ受講114名の合計139名の方にお申込みいただき、皆様にご受講いただきました。また、令和5年度は定員を対面受講25名、アーカイブ受講80名に設定し、結果として対面受講28名、アーカイブ受講115名の合計143名と、非常に多くの方にご受講いただいております。今年度の受講生のうち全体の約25%が、昨年度から継続してご受講いただいた方となっております。

受講生の方々の内訳については、主に舞台芸術の関係者の方々と、アーカイブ実務者の方、学生の方が多くなっています。今年度は昨年度よりも舞台芸術関係者の方々の受講が増えており、講師の方に作り手の方が多かったということもあると思いますが、年々業界としてもアーカイブへの意識が高まっているのを感じています。また、アーカイブ機関の実務者の方も多く、舞台芸術、パフォーマンスアートのようなもののアーカイブについて、何が正解なのかわからないといったお悩みを抱えている方々にもご受講いただいております。



ドーナツ・プロジェクト連続講座

講座の詳細な内容については、事業 HP にも記載されておりますので、そちらもご覧ください。初めに、舞台芸術アーカイブについての講座を設計するにあたって、舞台芸術業界の方々にお集まりいただき、業界におけるアーカイブの実情や課題を話し合っていました。そこで出た多くの課題が、舞台芸術のアーカイブと言ったときに、人によってイメージするものが非常に様々で、何を集めるか、何をどこまで保存するかが常に問題になる、ということでした。そのため令和4年度はまず「自分が志向するアーカイブとはどのようなものか、自分の言葉で語れるようになる」ということを目標としました。舞台芸術アーカイブとは、という理論編から始まり、舞台芸術業界でのアーカイブの実情、保存や管理の方法、それ

から著作権と契約についてなどを学ぶ10回の講座で構成しました。そして、その後全2回のワークショップを実施し、受講生に提出していただいた事前課題を元にアドバイザーの方々と一緒にディスカッションをおこないました。

令和4年度講座内容
 目標：自分が志向するアーカイブとはどのようなものか、自分の言葉で語れるようになる

8/04 第1回「アーカイブについての基礎知識と事例」
 講師 岡室美奈子・中西智範・松谷はるな（アーツカウンシル東京）

第2回「舞台芸術とアーカイブ—演劇にとって記憶とは何か？」
 講師 吉見俊哉（東京大学大学院情報学館教授）

8/29 第3回「演劇の映像化事業の商業ベースでの成立に向けて」
 講師 高萩宏（世田谷パブリックシアター館長）

第4回「のこしたものの利活用について～EPAD活動紹介～」
 講師 三好佐智子（EPAD事務局）

令和4年度ワークショップ内容

8/29 第5回「アナログ媒体のデジタル化とデジタルデータの適切な保存方法について」
 講師 山下郁美（株式会社IMAGICAエンタテインメントメディアサービス）

第6回「公演情報をどのように残すか～アーカイブを想定した整理や管理の方法などについてJDTA等を例に実践的に解説～」
 講師 中西智範（演劇博物館）

8/30 第7・8回「舞台と配信の著作権の基礎」
 講師 福井健策（骨董通り法律事務所 代表パートナー）

第9・10回「契約処理について—著作権をはじめとした権利処理を行う上で必要な契約処理について具体的・実践的に解説する」
 講師 田島佑規（骨董通り法律事務所）

令和4年度ワークショップ内容

9/08 第11・12回「それぞれの受講生が考える舞台芸術アーカイブのあり方について」
 アドバイザー 吉見俊哉、高萩宏、米屋尚子、松谷はるな、岡室美奈子、中西智範

1. 問題提起 中西智範
2. 事例紹介 米屋尚子（EPAD事務局）
3. 課題発表
4. ディスカッション

事前課題

- ・どんな舞台芸術アーカイブをつくりたいか
- ・どんな舞台芸術アーカイブがあったらいいか
- ・舞台芸術アーカイブを活用してやってみたいこと

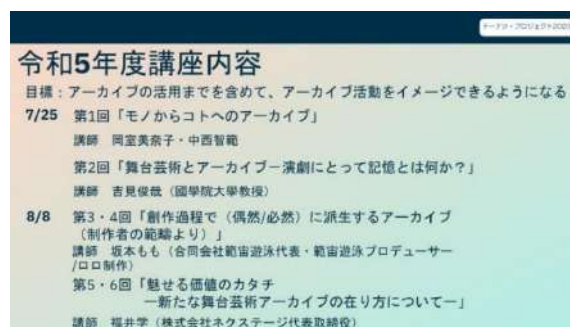
今年度はより実践的な講座を目指し、それぞれの講座内でワークやディスカッションを増やしました。創作現場で活動されている坂本ももさんや、木ノ下裕一さんをお招きし、実際の取り組みを事例としてお聞きしたり、舞台公演映像を撮影するサービスなどを提供している株式会社ネクステージ代表取締役の福井学さんにご登壇いただき、「記録映像の残し方」についてお話しいただきました。また、著作権と契約の講座では、骨董通り法律事務所弁護士の福井健策さんと田島佑規さんに昨年度の知識を踏まえたワークを実施していただきました。やはり知識を身につけるだけでは直接的なアーカイブ活動には結びつきづらいので、今年度の受講生の方々からは具体的な事例について学べたことによって、アーカイブ活動への1歩を踏み出すきっかけになったという声や、著作権や契約のワークによって、これまで得た知識を使う力が身についた、といった感想を多くいただいております。その後全2回のワークショップでは、国立国会図書館の提供するジャパンサーチのマイギャラリーという機能を使って、デジタルアーカイブを活用し、新たなアーカイブをつくってみるということを行いました。受講生の方々の事前課題を元に、アーカイブを活用する立場から、利活用も含めたアーカイブの構築について、アドバイザーの方々とディスカッションをおこないました。全ての講座を対面で受講し、課題を提出していただいた受講生の方には、修了証をお渡ししています。

これからの課題と展望

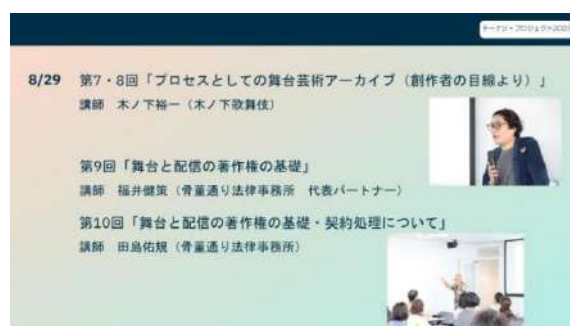
本事業を通じて、現在課題として感じているのは、舞台芸術のアーカイブにおいては常に何を、どこまで残すのかが問題になるということです。何をどこまで残すのかは、結果的にそれぞれの劇団やアーティスト、その関係者など、資料を生み出す立場の方々の基準に依存せざるを得ません。その

ため、ご自分やご自分の団体にとって何を、どこまで残すのかを決めるためにも、これまで実施してきたような、様々な角度から舞台芸術のアーカイブの知識や理論、事例についてお伝えする講座を提供していければと考えております。

また、アーカイブという面においては、研究者やアーカイブ機関、舞台芸術の作り手や関係者などの協力関係の構築がなかなか難しい状態であることも実感しております。そのため、本講座や、それにまつわる舞台芸術アーカイブに関するイベントを通じて、様々な立場の方々が協力関係を築きながら、舞台芸術アーカイブをより発展することができる環境づくりに貢献できればと思っております。



令和5年度講座内容
 目標：アーカイブの活用までを含めて、アーカイブ活動をイメージできるようになる
 7/25 第1回「モノからコトへのアーカイブ」
 講師 岡室美奈子・中西智範
 第2回「舞台芸術とアーカイブー演劇にとって記憶とは何か？」
 講師 吉見俊哉（国学院大学教授）
 8/8 第3・4回「創作過程で（偶然/必然）に派生するアーカイブ（制作者の範疇より）」
 講師 坂本もも（合同会社範音遊泳代表・範音遊泳プロデューサー/口演制作）
 第5・6回「魅せる価値のカタチー ー新たな舞台芸術アーカイブの在り方について」
 講師 福井学（株式会社ネクステージ代表取締役）



令和5年度講座内容
 8/29 第7・8回「プロセスとしての舞台芸術アーカイブ（制作者の目標より）」
 講師 木ノ下裕一（木ノ下歌舞伎）
 第9回「舞台と配信の著作権の基礎」
 講師 福井健策（骨董通り法律事務所 代表パートナー）
 第10回「舞台と配信の著作権の基礎・契約処理について」
 講師 田島佑規（骨董通り法律事務所）



令和5年度ワークショップ内容
 9/15 第11・12回「舞台芸術アーカイブの活用ワークショップ」
 アドバイザー 後藤隆基、半田桃子、吉見俊哉、岡室美奈子、中西智範
 1. 建旨説明 田村優依
 2. 事例紹介 後藤隆基（立教大学江戸川弘彦記念大衆文化研究センター助教）
 半田桃子（株式会社momocan）
 3. 課題発表
 4. グループワーク
 5. ディスカッション
 事前課題 ジャパンサーチのマイギャラリー機能を使って、既にあるデジタルアーカイブを活用し、新たなアーカイブをつくってみる

DONUTS PROJECT

第1部

「アーカイブガイドブック」の紹介



早稲田大学演劇博物館デジタルアーカイブ室の中西と申します。私からは『アーカイブガイドブック』（以下、ガイドブック）の紹介をしたいと思います。ガイドブックの作成の経緯、内容の紹介、ガイドブックに込めた期待や展望という順でお話しします。

ガイドブック作成の経緯

ガイドブックは本誌と『ファーストステップガイド』の2つで構成しています。劇団や劇場、カンパニーをはじめとする舞台芸術に携わるみなさんが、自らの力で、アーカイブをおこなうことをサポートしたいという考えから作成したものです。舞台芸術関係者からは、「アーカイブをしたいけれど、どうしたらいいかわからない」といった声をよく聞くことができました。昨年度の事業で翻訳し、公開した American Theatrical Archive Project 発行の『Preserving Theatrical Legacy』は、日本の舞台芸術分野でそのまま活用するのは難しいだろうと感じていました。その大きな理由は、アメリカと日本の間では興行システムや創作表現などのスタイルや流儀の違いが大きいからです。例えばアメリカではブロードウェイに代表されるように、

一つの作品を専用劇場で一定期間上演するロングランシステムが発展していますが、日本では多くの小劇場が採用するリミテッドパフォーマンスという仕組みで、より自由で流動的な興行や創作スタイル、表現方法を好む傾向にあります。このような違いを踏まえると同時に、アーカイブへのハードルをより低く感じてもらえることを目標に、日本国内に向けた新たなガイドブックを作成することになりました。

このガイドブックの対象としては、舞台芸術の関係者をはじめとし、博物館や美術館などのアーカイブ機関の関係者や実務者、また研究者や教育者、舞台芸術のファンに関わらず広く一般の方に活用していただきたいと考えております。

本ガイドブックは、アーカイブをおこなうための要点やコツをまとめたガイド本として利用されることを想定しています。ですのでアーカイブをおこなうための実施の手順などはここには含まれていません。アーカイブ学や情報学などの諸分野の知識をベースにし、リンク集や TIPS を多く掲載しました。本文に加え外部のリソースを加えることによって、さらに幅広い知識を得られるようになっております。また、公開は少し先となりますが、ガイドブックには付録集をつける予定です。付録集には図表など、ひな形として活用できるものを掲載する予定ですので、実際にアーカイブを実践するための手助けとなるだろうと思います。

ガイドブック内容紹介

ガイドブックはこの全 10 章で構成されています。興行システムや流儀の違いなどをカバーできるように、特に工夫を加え作成に苦労したのが 4 章と 5 章です。アーカイブとして何を残すか、残せるかについては、それぞれの組織や団体、個人の活動によって大きく変わります。そこで 4 章では、アーカイブの主体となるそれぞれの母体が、

組織の沿革や業界内での立ち位置、活動内容を振り返り、それぞれの活動の過程において生み出される資料を明らかにするというアプローチを紹介しています。それを元に、5章ではアーカイブとして何を残すかというの方法を紹介しています。

ガイドブックへの期待と展望

章 2.5 では、舞台芸術をアーカイブする理由 TOP10 を掲載しています。先ほどご紹介した ATAP のマニュアルにおいても、同じように 10 個の理由を挙げられています。そのアイデアを引継ぎつつ、このガイドブックでは次のような工夫をしました。アーカイブをおこなう理由として、外的な要因が主に注目されがちだと思います。例えば文化の発展や社会的な背景などです。ですが、このガイドブックではより制作者側の、内部のメリットを最大限に感じてもらえるよう、内部に着目した理由を中心に記載しています。

ガイドブックには、たくさんの期待が込められています。その期待は次の三つです。一つ目は、このガイドブックをぜひ皆さんのアーカイブ活動のきっかけに利用してほしいということ、二つ目は、このガイドブックをコミュニケーションツールとして活用してほしいということ、そして三つ目が、このガイドブックが成長・発展してほしいということです。

それぞれの期待がどのようなことか、お話しします。まず、活動のきっかけについてです。アーカイブというのは、皆さんの舞台創作の活動の基盤として、きっと活用できると考えています。クリエイションの面でいうと、例えば創作チームでステップアップしながら、充実した創作活動のために利用できますし、また再演の機会に常に備えておくことにも活用できます。セルフアピール面では、例えば助成金獲得のために活用できたり、劇団のファン獲得のためにも活用できるはず。さらに、マネタイズの面では、アーカイブによって保

ガイドブック本紙の目次

1. はじめに
2. 「舞台芸術」と「アーカイブ」
3. アーカイブは誰の役に立つのか？
4. 私たちは何を持っているのか？
5. 何を残すべきか？
6. 後世に残すためにどのような処理をするか？
7. どのように記録を保護するか？
8. アクセスと利用および公開
9. アーカイブの計画
10. コラボレーション

章 2.5. 舞台芸術をアーカイブする理由——TOP10

① 組織の活動の中の大切な“宝物”を発見し保存する
② 組織の継続的な活動支援ツールとして活用できる
③ より魅力的な活動を行うための創作支援ツールとして活用できる
④ 組織の活動をアピールするためのポートフォリオとして活用し、助成金を得る
⑤ 記録の整理・保存のための時間とお金の節約
⑥ 組織内のコミュニケーションを改善する
⑦ 「記録活動」という精神的負担からスタッフを解放する
⑧ アーカイブ化されない古い記録を整理・廃棄することで、スペースの節約に繋がる
⑨ 芸術文化の発展という社会貢献の役割を担うことができる
⑩ 地域や国の教育・文化機関と協力する

内部に着目した理由
外部に着目した理由

存された記録映像や様々な資料をコンテンツ化しておくことで、収益アップも見込めますし、長期的な視点ではそれらの資料を活用した教育事業や、人材育成にプラスをもたらすことも期待できるはず。です。

次に、コミュニケーションツールとして活用することについてお話しします。各劇団や劇場、カンパニーなどでは、アーカイブ活動のために専用の担当者を設けることは現実的に難しい状況であることが想像されます。このガイドブックをハブとして、アーカイブの実践で得たノウハウの共有や、外部のアーキビストの協力、アーカイブ機関などとの協力体制の構築が、今回のイベントや皆さんが主催する演劇ワークショップなどによって広まっていくことを期待しています。

そして、このガイドブックが成長・発展していくことについてお話しします。このガイドブックが共有され、コミュニティが形成されていくと、アーカイブの実践経験が蓄積されていくはず。それぞれの分野における成功・失敗事例やノウハ

ウ、学問分野での新しい情報や、時代の変化による創作そのものについての情報などをガイドブックに反映していくことで、舞台芸術分野において誰でも活用できるような、標準的なガイドとして発展していくことを期待しています。これまで挙げた三つの「使う」「共有する」「育てる」という期待を繋げていくことで、舞台芸術分野におけるアーカイブ資料が標準化され、誰でも広く活用できるようになるかもしれません。

最後に、この半年間ほどガイドブックの制作で感じたことを共有します。これまで、ドーナツ・プロジェクトでは、舞台芸術のアーカイブのイメージを共有するために、「ドーナツ型のアーカイブ」という表現を使ってきました。これは対象となる様々な資料を残していく重要性を共有するにはわかりやすいイメージですが、日本の舞台芸術における自由な表現や活動を考えると、創作活動全体におけるプロセスの保存の重要性を見失ってしまうのではないかと考えるようになりました。例えば、台本や戯曲は創作の過程で改変やバージョンの違いが生まれたりします。初稿の台本と稽古の記録映像や、最終的な台本と公演時の記録映像はそれぞれお互いに関係性を持っていると考えられます。このように舞台芸術のアーカイブでは、時間やプロセスの概念を含め、バウムクーヘンのような、階層型のアーカイブとして捉える必要があるのではないかと考えるようになりました。発表は以上になります。

1. 活動のきっかけ

みなさんの活動の基盤として、きっとアーカイブを活用できるはず

まずは、みなさんのチームの中で、アーカイブについて考える機会を設けていただきたい！

- クリエーション**
 - 充実した創作活動、チームでのステップアップ
 - 再演の機会に備える
- セルフアビール**
 - 助成金獲得の可能性を高める
 - 多くのファンや熱心なファンを獲得
- マネタイズ**
 - コンテンツ化による収益Up (短・中期の視点)
 - 教育・人材育成面でのプラス効果 (長期の視点)

2. コミュニケーションツール

(現実的には)劇団やカンパニーに、アーカイブ専門員をおくのは難しい

ガイドブックをハブにした、協力や連携の仕組みを期待

- アーカイブの実践で得られたノウハウやアイデアの共有
- アーカイブ学などの専門分野の知見の取り込み、アーキビストの参加
- 博物館や美術館などの文化機関との協力体制の構築

例) アーカイブに関するイベントやフォーラムの開催
例) 演劇ワークショップなどでの活用

みんなで解決

自分達、文化機関、カンパニー、アーティスト、一般市民
→海を越えて繋がる！

アーカイブ専門員の不在

3. ガイドブックの成長・発展

劇団や劇場・カンパニーで実際に利用される
+
コミュニティで実践内容が共有される

その経験をガイドブックに反映

- 成功事例/失敗事例を収録
- 新しい技術の情報
- 時代に合わせた舞台芸術分野の諸情報など

舞台芸術分野で使われる、標準的なガイド&マニュアルに！

- ベストプラクティス
- 最も効率の良い手順

DONUTS PROJECT

第2部

座談会レポート 舞台芸術アーカイブの展望

田村優依（文責）



登壇者

福井健策 弁護士・ニューヨーク州弁護士 骨董通り法律事務所代表パートナー、一般社団法人 EPAD 代表理事、緊急事態舞台芸術ネットワーク常任理事

松井周 劇作家・演出家、劇団サンプル主宰

坂本もも 合同会社範宙遊泳代表・範宙遊泳プロデューサー／ロロ制作

中西智範 早稲田大学演劇博物館

田村優依 早稲田大学演劇博物館

司会 岡室美奈子 早稲田大学文学学術院教授、文化推進部参与



*1 範宙遊泳 WEB サイト

<https://www.hanchuyuei2017.com/>

*2 ワンダーランド

<https://www.wonderlands.jp/archives/17406/>

*3 富田倫夫 とみた・みちお (1952-2013)

編集者。「青空文庫」主宰者、サイトの呼びかけ人の一人。著作に『パソコン創成記』『本の未来』などがある。

第二部座談会には、2年連続でドーナツ・プロジェクトの連続講座に講師としてご出講いただいた弁護士の福井健策氏、劇団サンプル主宰、劇作家・演出家の松井周氏、福井氏と同じく今年度の連続講座に講師としてご出講いただき、また、『舞台芸術に携わる人のためのアーカイブガイドブック（以下、ガイドブック）』と『ファーストステップガイド』の作成にもご協力いただいた、劇団範宙遊泳プロデューサー・劇団ロロで制作も務める坂本もも氏をお招きし、『ガイドブック』の内容や普及について、また、舞台芸術アーカイブのこれからについて語っていただいた。司会は岡室美奈子が務め、演劇博物館からは中西智範、田村優依も参加した。

まず、登壇者の方それぞれに、自己紹介も兼ねた「アーカイブとの関わり」を語っていただいた。坂本氏はこの日のために、劇団範宙遊泳のWEBサイトの「MEDIA」ページを整えたという。その「MEDIA」ページは、範宙遊泳の作家やメンバーが過去に受けたインタビューや、作家のエッセイなど、WEBで公開されている数々の記事のリンクが時系列順に表示されており、劇団の歩んできた一つの歴史が見られるページとなっている*1。坂本氏は、それらの記事のリンクをまとめるにあたって、2011年には「ワンダーランド」*2という公演の批評（レビュー）が載っているサイトがあったことに言及し、現在は若い劇団やアーティストが公に評価を受け、フックアップされる場がどんどん少なくなっており、若い作り手の創作活動、作品を残していけるような仕組みを考えていかなければならない、と語った。

続いて松井氏は、2020年からアーツカウンシル東京の助成を受けて実施している「松井周の標本室」という企画について紹介。「松井周の標本室」とは、プロやアマ、年齢差や地域差に関係なく作品を作り、発表することを目的としたコミュニティを指す。コミュニティ内では創作過程をオープンにしながら、活動自体を記録することにも力を入れている。松井氏は、様々なものを保存し、それらをアーカイブできていれば、作品を作った当時の時代と「今」を比べることができ、作品を作る時のヒントになったりもすると語った。

最後に、2022年・2023年のドーナツ・プロジェクト連続講座において2年続けて講座の講師としてご登壇いただき、現在はEPAD事業の代表理事も務める福井氏が、「アーカイブ」に対する目覚めについて語った。それは、2006年頃の著作権保護期間の延長問題についてのフォーラムを立ち上げた際の、富田倫夫氏*3との出会いだという。富田氏の「文化というのはみんなの上に広がっている青空みたいな

*4 青空文庫

誰にでもアクセスできる自由な電子本が
集められたウェブサイト。

<https://www.aozora.gr.jp/>

もので、その恵みはできるだけ多くの人を得られるべきだ」という理念から生まれた青空文庫*4での活動に、感銘を受けたことが語られた。

『ファーストステップガイド』感想・評価

本事業のHPで公開しているガイドブックは、『ガイドブック』と『ファーストステップガイド』の2種類がある。まずは『ファーストステップガイド』について、登壇者それぞれに読んだ時の感想などをお話しいただいた。登壇者の方々の中では、『ガイドブック』よりも『ファーストステップガイド』の方が読みやすく、参照しやすいという声が多かった。松井氏は、「アーカイブを残す」ことが実は財産になることや、他にも予算の作り方、スタッフや俳優への謝礼の金額や機材の相場などを誰にも聞くことができない場合にアーカイブが参照できることなどが『ファーストステップガイド』には書かれており、これがあればコロナ禍を経て演劇の作り方や始め方がわからなくなっている若い人が参照できる、と述べた。また、ガイドブックでの書き方として、「こうしなさい」とまでは書かれていなかったことが面白い、とも話した。

ガイドブック本誌と『ファーストステップガイド』の作成に舞台芸術関係者の有識者として携わった坂本氏は、『ファーストステップガイド』の6,7ページ「クリエーション」の執筆も担当いただいた。坂本氏は、「クリエーション」ページを書くにあたって、ご自身が制作者・プロデューサーとして日々取り組んでいることを書いたという。劇団活動というのは前の作品や公演を一つずつ積み重ねて土台にしていくことだと話し、今やっていることが未来の自分を助けるということに気づいてもらえるよう心がけた、と話した。

公演をおこなう時には、作品を作るだけでなく様々な細かいことの集積で物事が動いていく。創作に行き詰ったとき、実は演出ノートや稽古場日誌、打合せの議事録にヒントが隠されていることも多い。また、公演にまつわる様々なセクションの進め方についても、本来、実際の現場で学ぶことが多かった。コロナ禍を経て、世代間だけではない様々な断絶が起きている。昔のように実際の現場で「先輩の背中から学ぶ」ということが難しくなっている今、新しく演劇を始める人に向けて、迷ったときに参照する・立ち返るものとして『ファーストステップガイド』があり、また、それを継承していければ、といったことが語られた。



『舞台芸術に携わる人のためのアーカイブガイドブック』仮版 感想・評価

*5 脚本アーカイブズ

一般社団法人日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム、またはこの一般社団法人による活動を指す。主にテレビ・ラジオの放送脚本を収集・保存・管理して公的機関に公開する活動をしている。



話題は『ガイドブック』の感想や評価に移り、福井氏はデジタルアーカイブ学会や日本脚本アーカイブズ*5、EPAD 事業など、数々のデジタルアーカイブの活動に関わった経験を踏まえ、ここまで体系的に整理を試みたガイドブックはほぼ無いだろう、と評価し、特に「何を残し、どう捨てるか」という視点を提示しているところが重要だと述べた。アーカイブは未来に向かって残すもの。そのため未来にとって何を残すのが正解なのかは、今の我々の時代からはわからない。何を残し、どう捨てるかは、残す人自身の内側に切り込んでいく作業になる。それを手助けするための視点を提示していることが、非常に重要な試みだと福井氏は評した。

『ガイドブック』作成にも協力いただいた坂本氏は、作り手の立場から、『ガイドブック』を時間的な制約などから読めない人もいることを考え、入門編として『ファーストステップガイド』を作ることになった経緯を述べつつも、多様な創作活動をしている人々がいる中で、入門編である『ファーストステップガイド』だけでは物足りない人のために、このように非常に詳細に書かれた『ガイドブック』が必要だろうと述べた。また、会場の来場者からは、デジタルアーカイブ学会憲章や肖像権ガイドラインなどの例を挙げながら、日々の活動の中で、立ち止まったり迷ったりした時に参照できるガイドブックがあることが心強いといった声や、『ガイドブック』のバージョンアップを希望する声もあがった。

司会の岡室からは、この『ガイドブック』を作る際に演劇博物館内でも議論をし、いわゆるマニュアルではなくガイドブックとして制作したことについての言及もあった。

舞台芸術のアーカイブのこれから

福井氏は著作権専門弁護士の立場から、アーカイブにおいて権利処理の知識は非常に重要だと述べ、権利処理が済んだ「使えるアーカイブ」を増やしていくことで、アクセシビリティも向上し、教育などの様々な場面で人々が触れやすくなっていく環境が整っていく。それと同時にガイドブックの需要も高まっていくだろうと指摘した。さらに、福井氏からはその「使えるアーカイブ」として残しておくために、残した資料を集める際に全て権利処理は済ませておいた方が

いい、という文言を『ガイドブック』に追加してはどうか、という提案があった。その一番の理由は、資料を集め、後から資料を利活用しようという時に権利処理を始めると、例えば権利を持つ人がいなくなってしまうかもしれないし、連絡が取れなくなっているかもしれない。これが非常に苦勞するという。それを受けて坂本氏は、舞台芸術業界では「残すこと」への意識なく作品を創作していた状況に鑑み、アーカイブすることが当たり前となると、創作に使える音楽や様々な素材も変わるため、これからは作り手の意識も「残すこと」を前提にした創作へと変化していくだろうと展望を述べた。この議論において印象的だったのは、福井氏の「アーカイブされることは作り手の権利」という言葉だ。アーカイブを残していくということは、何を、どのように残すか、という問題にも繋がり、作り手の立場であれば、「自分の作品はこのように残って、このように人々に伝わってほしい」という姿勢を表明することにもなる。それが、写真の利用は許可するが、動画の利用は許可しない、などの、二次利用の際の利用条件を判断することに繋がる。このように作り手はもっと意思表示すべきだと、福井氏は語った。

舞台芸術アーカイブの価値の向上は、舞台芸術そのものの価値の向上や、舞台芸術に触れる人々を増やすことに繋がる。座談会の最後は、舞台芸術アーカイブと舞台芸術、それぞれの相互作用についての話題となった。

松井氏は、これまでおこなわれてきた様々な舞台芸術作品の情報の繋がりが直感的にわかるような、サブスクリプション感覚で使える舞台芸術アーカイブがあれば、作り手にとって創作に役立つだけでなく、(観客や一般の人びとの)演劇に対する親しみやすさの向上にも繋がると指摘。司会の岡室も、現状では Japan Digital Theatre Archives(JDTA)*6 や「日本戯曲デジタルアーカイブ」*7 など個々のデジタルアーカイブにとどまっているが、それらがより密接に連携できれば、アクセシビリティの向上にも繋がり、「サブスク感覚」で使えるアーカイブに近づくのでは、と述べた。

福井氏も、アーカイブがなければ、これまでの舞台芸術において何が生み出されてきたかを知らないことになる、と述べ、現在の舞台芸術業界において、過去と同じような作品を「新しい」と評価することで、舞台芸術そのものの可能性が狭まってしまっている可能性を指摘した。さらに、アーカイブにアクセスできる、利用できるということは、教育やビジネスチャンス、様々なクオリティ・オブ・ライフにとって重要なことだと語った。舞台芸術が身近なものになることが、アーカイブの大きな意義の一つだ。

*6 JDTA

は、緊急舞台芸術アーカイブ+デジタルシアター化支援事業(EPAD)の一環として、演劇博物館が開設した、現代演劇・舞踊・伝統芸能の三分野にわたる舞台公演映像の情報検索特設サイト。

<https://www.enpaku-jdta.jp/>

*7 日本戯曲デジタルアーカイブ

一般社団法人日本劇作家協会が企画・制作・運営し、公開されているデジタルアーカイブ。緊急舞台芸術アーカイブ+デジタルシアター化支援事業によって制作された。「劇作家名」「作品名」で検索することができ、作品ページからは、作品や作家の詳細情報、戯曲データを読むことができる。

<https://playtextdigitalarchive.com/>

*8 別役実 ベつやく・みのる(1937-2020)

劇作家。サミュエル・ベケットに影響を受け、日本の不条理演劇を確立した第一人者。『マッチ売りの少女』と『赤い鳥の居る風景』で第13回岸田國士戯曲賞を受賞。幻想的で独創的な作風で、登場人物が固有名を与えられていないことが多い。エッセイや童話の分野でも活躍した

坂本氏は、自らの劇団の活動として、子供向けの作品を作ったり、子供向けに公演をしたりしているが、芸術に普段触れ合うことがない子供にこそ必要だと思ふと述べ、劇場に来られなくても作品に触れられたり、芸術にアクセスしづらい人々に向けて、作り手がそこへ出向いていけるきっかけとしてアーカイブがあるといい、自分たちもそのようなことを考えながら活動したい、と語った。松井氏も同様に、もっとゲームに対する感覚のように、アーカイブも合わせて演劇に対する敷居を下げたいと述べ、それに対し福井氏は日本におけるダンス人口が増えた理由に義務教育に取り入れられた事例を提示。最後に司会の岡室も、作家の別役実*8による「日本ではこれからも無差別殺人が増えていくかもしれないけれど、みんな演劇をやればいいんだ」という言葉を紹介し、アーカイブというと少し敷居が高いかもしれないが、舞台芸術アーカイブが演劇を見る行為や、演じる行為に繋がっていくといい、と語った。

これまで舞台芸術界では、一つの作品や公演に関する資料が多岐に渡るため、残すことに注力してこなかったと言える。しかし本座談会全体を通して、EPAD 事業や演劇博物館などの取り組みを通じてアーカイブとして残していくことへの重要性を改めて認識したと同時に、舞台芸術に携わる人々が「残す」意識へ変化していく必要があること、そのためには本プロジェクトで作成したガイドブックや権利処理などの知識を提供する場が必要であることを確認した。本シンポジウムが、事業成果報告のみにとどまらず、今後の舞台芸術アーカイブについて考え、議論するきっかけの一つとなれば幸いである。

